國學院大學学術情報リポジトリ

小特集「文学と哲学」：企画趣旨

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000266

小特集「文学と哲学」
―企画趣旨―

哲学と文学は、一見すると対極に位置するものに見える。一般に、哲学では論理的な推論や理性的な思考に基づいて普遍的な真理が探究されるのに対して、文学作品では読者の意表をついたり感情に訴えたりするような個別的なフィクションが描かれるからだ。実際、頭で理解するよりも先に耳と体で覚えるような詩を初等教育から遠ざけるよう説くプラトン（BC 427-347）『国家』篇第10巻のいわゆる「詩人追放論」をはじめとして、数多くの哲学者が文学作品に対する警戒心を一貫して持ち続けてきた。他方、文学作品を好んで引用する哲学者は、ややもすると哲学的な理論の正しさを証明するために、文学作品がもつ豊かさを無視して自らの理論をあてはめてしまいがちである（そうした目的のために読まれた文学作品の解釈ほど興ざめするものはない）。

こうした表面上の対立とは裏腹に、哲学と文学が共通の関心をもつこともまたよく知られてきた[1]。とりわけ、ソクラテス以来、哲学者が問い続けてきた「よく生きる」とはどのようなことかに関連する様々な事柄（人間の美しさや醜さ、賢さや愚かさ）は、文学作品の主要な主題でもあり続けた。こうした事柄について、哲学も文学も読者に思考を促す。哲学と文学が思考を促す仕方は異なるが、哲学が理性的な推論だけに訴えるわけではないのと同様、文学作品もまた感情にのみ訴えるわけではない。また、哲学者や倫理学者は古来より、様々な文学作品を用いて思考してきたし、作家もまた文学作品を通して哲学的・倫理的な思考を提示してきた。こうした思考は、いかなる点で哲学的ないし文学的と呼べるのだろうか。

こうした背景から、筆者を研究代表者とし、哲学を専門とする藤野寛さん、フランス文学を専門とする笠間直穂子さんと進藤久乃さんを共同研究者に迎え、2022年度の学部共同研究費「文学と哲学」の助成を得た共同研究を行った。（1）文学作品がいかなる哲学的・倫理的思考を可能にするのか、（2）哲学的思考が文学作品を通した思考にいかなる寄与をなすかを考察することを課題として、2022年度に計４回のワークショップを開催した[2]。本小特集は、このワークショップにご登壇頂いた方々の論考を集めたものである。

（文責　小手川正二郎）

（1）例えば最近では、勢力・古田2023は、哲学と文学が共に「人の心の奥に宿り続け、想像力を刺激し、人生を振り返りながら生きていくための手がかりを与えてくれる」点に着目し、文学作品を手がかりに、哲学的思考を辿ることを試みている。

（2）第１回「哲学・文学・人類学――コーラ・ダイアモンドの思考を手がかりに」（11月26日（土））登壇者：小手川正二郎・中村沙絵
第２回「文学と思想の交差・交錯」（12月17日（土））登壇者：進藤久乃・門馬広明
第３回「小説を読みとく、思想を読みとる」（12月24日（土））登壇者：笠間直穂子・渡邊英理
第４回ワークショップ「哲学と文学――ドイツから」（１月21日（土））登壇者：藤野寛・須藤訓任
四回のワークショップの準備や開催にあたって、リサーチ・アシスタントとしてお力添え頂いた聖心女子大学大学院の堀江早良さんにこの場を借りてお礼申し上げる。